聖寿寺館跡
～三戸南部氏の本拠～

布施　和洋
（南部町教育委員会社会教育課
史跡対策室総括主査）

聖寿寺館（青森県南部町）は北東北最大の戦国大名三戸南部氏の居館で、当時の幹線道路だった奥州街道と、八戸・鹿角街道が交差する馬淵川左岸の高台に築かれた。

城館の形は長方形に近く、四方を幅10～30メートルの直線の堀で区画し、南西は高さ約30メートルの断崖により守られている。中心となる曲輪は北が長さ約300メートル、東は約180メートル、南は約200メートルの規模を有する。イメージ的には戦国時代のお城というよりも室町時代の守護大名の方形居館に近い。

上空から見た聖寿寺館跡（南から撮影）
＝2021（令和３）年10月28日・南部町教育委員会撮影提供

居館規模としては、甲斐国の守護大名武田氏の居館は南北約190メートルで東西約200メートル。六ヶ国の守護大名となった大内氏と九州の戦国大名大友氏の居館は、どちらも約200メートル四方である。三戸南部氏の居館がこれらに全く引けを取らない規模だったことがうかがえる。

三戸南部氏は室町・戦国期で都から最も遠い地を支配していた領主であったが、なぜか発掘調査では都との強い結びつきと、当時の最先端技術の導入を示す発見が相次いでいる。

城館中心部からは、東北地方の城郭史を塗り替えるような南北18間、東西21間の東北最大となる掘立柱建物跡や、2階建てと考えられる特殊建物跡、一辺45センチ角の門柱などが確認されている。北側出入口では、16世紀前半の長さ20メートルに及ぶ版築土橋や、15世紀後半から16世紀初頭に位置づけられる国内でも古い段階の枡形状虎口が確認されている。

聖寿寺館は1539（天文8）年に炎上したと伝えられ、出土遺物等から15世紀前半に築城され、約100年余りの間、三戸南部氏の居館として機能していたことがうかがえる。

城内からは約4千点以上の中世陶磁器が出土しており、このうち7割が中国産陶磁器、3割が瀬戸美濃焼や越前焼、信楽焼などである。青磁酒会壺などの高級陶磁器が多く、権威付けの小道具として用いられた可能性が考えられる。特に藍色の釉薬が施された瑠璃釉水注は、国内で首里城（沖縄県）と聖寿寺館でしか出土していない。

城館の中心的な建物付近からは、京都周辺で制作されたと考えられる犬の土人形や東北唯一の金箔土器など、希少性の高い遺物も出土している。

注目されるのは、中世アイヌ文化との関わりが考えられる骨角製品や道具素材の鹿角、有孔銭貨、シロシ（印）付染付皿の存在だ。アイヌ文化に関係する人々が城館内で何らかの役割を担い、長期間滞在していたことが想定できる。和人による室町・戦国文化と北方のアイヌ文化が入り混じる状況が確認できる。

昨年、金属加工に用いる坩堝が国立科学博物館によって分析された結果、金・銀・銅・真鍮など、多様な金属を使って製品が加工されていたことが明らかとなった。特に室町・戦国期における真鍮生産の確認は東日本では初めてで、美濃国守護土岐氏の城下町遺跡に次ぎ国内2番目に古い。16世紀初頭に中国から伝来した真鍮生産技術が、国内でも早い段階で南部氏によって取り入れられたことが明らかとなった。

文献資料が極めて少ない中世南部氏の歴史の多くはまだまだ謎に包まれている。来年以降も南部氏の本拠地解明のため、調査・研究を継続していく予定である。

『東京と青森』646号
東京青森県人会　2022年2月